令和２年度　東国文化自由研究レポート

研究テーマ

綿貫観音山古墳～石室の石はどこから～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

２年４組８番

氏名　：　木部　陽夏乃

綿貫観音山古墳～石室の石はどこから～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校
２年４組８番　木部　陽夏乃

1，調査の動機

昨年度の東国文化自由研究における表彰式の際、群馬県立歴史博物館の館長さんが、ご自身の研究課題である『古墳内の石室の石』について説明してくれた講話を聞き、今まで全く興味の無かった『石室の石』について、それぞれの古墳の石室は、どこの石を使い、どこから運ばれてきたのかなど、大変面白そうだと興味をかき立てられた。そして、実際に綿貫観音山古墳を見に行った際に石室の石が非常に大きいことに驚かされた。そこで、今回、綿貫観音山古墳の石室に使われている石について、どこの石で何という石なのか、どこから運ばれてきたのか調査してみたいと考えた。

2，調査方法・内容

今年は、新型コロナウイルス感染症が流行していたため、自宅にてインターネットを中心に調べた。

（1）　群馬県の公式 HP の「史跡観音山古墳について」のページ、高崎市の公式 HP の「観音山古墳について」のページを読んだ。

（2）　群馬県の地図を使って調べた。

（3）　高崎市にある綿貫観音山古墳を実際に見に行った。

3，調査の結果

① 綿貫観音山古墳について

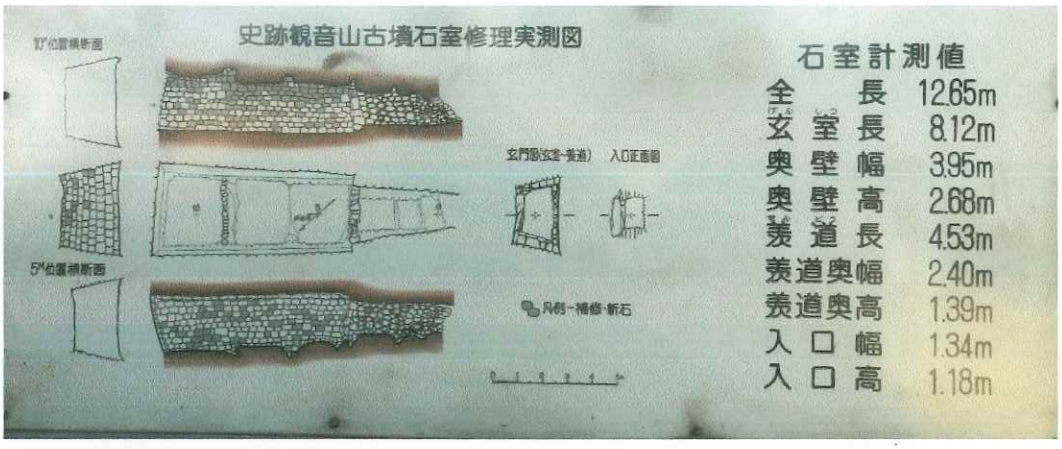
観音山古墳は、高崎市の東部、烏川の支流井野川の右騎士台地上に立地する。前方後円墳である。墳丘は 2 段築成で、その規模は全長 98m、後円部径 61m、同高さ 9.5m、前方部幅 63m、同高さ 9.1m を計る。

墳丘の周囲には、馬蹄形を呈する 2 重の周堀が巡る。この外堀の外縁部を古墳の範囲とすると主軸全長は 185m に及ぶ。

本古墳の特色を語る上で欠かせないのが、墳丘から検出された埴輪群である。特に形象埴輪の配列状況は、古墳時代の埋葬儀礼の一端を具現するものとして全国的にも注目を集めている。

内部施設は後円部に位置し、南西に開口する両袖型の横穴式石室である。石室の規模は全長12.5m、玄室長8.2m、同幅3.5m、羨道長4.5m、同幅2mを計る。石室の石材は、羨道入り口寄りの半分が川原石、その他は全て榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩の削

石である。玄室に壁面は五面加工した人頭大の角閃石安山岩を互目積みし、随所に切り組の手法が見られる。天井石には巨大な牛伏砂岩の自然石を使用している。



② 石室の天井に使われている巨石はどこから運ばれてきたか

天井石に使用されている牛伏砂岩は、綿貫観音山古墳のある場所から、南西の方向に 10km ほど離れた所にある高崎市吉井町の牛伏山から産

出されたと考えられている。

下仁田町東部から埼玉県滑川町まで断続的に露出する海成砂岩は、文魔剣ないにおいて高崎市吉井町の牛伏山を模式地とする牛伏砂岩と呼ばれ、人々は石器時代から現在までこの砂岩を石材として利用して生きた。石材としての牛伏砂岩は、その採石地によって石材名がつけられることがあり、特に多胡碑をして用いられた高崎市吉井町産の牛伏砂岩は多胡石としても名高い。

この石室の天井石として使用されている巨大な牛伏砂岩は、一番の大きい石で 22 ﾄﾝもあり、それを 6 つも使用している。

しかし、綿貫観音山古墳のある高崎市綿貫町と、牛伏砂岩が採石される高崎市吉井町牛伏山は、直線距離にしても約 10km もある。天井石

の重さが最大で約22 ㌧もある牛伏砂岩を、交通機関も発達していない当時の人々がどのように運んだかを考えると謎が深まる。

★綿貫観音山古墳

高崎市綿貫町 1752

車で 13.5km

★牛伏山展望台

高崎市吉井町吉井川 371

③ 石室の巨石はどのようにして運ばれてきたか

石室で使用する巨石を牛伏山で切り出した後、どのようにして約 10km も離れた綿貫観音山古墳まで運んだのか、トラックも重機も無い当時の交通網を考えると、川を利用し舟で近場まで運び、そこからはそりで引き上げたと想像できるが、それにしても大変な作業ではなかったろうかと思う。

石材を運ぶ前に、石材を予定したサイズに切り出す必要がある。この綿貫観音山古墳の場合は、牛伏山が石材の産出地である「石切場」となり、そこで石を切り出したと思われる。

石を切り出すと言っても、どうやって切り出したのか、のこぎりなどで切ったわけではないと考える。おそらく城壁等を作る際に用いられていた、底が V 字状のクサビである「矢」のようなものが当時にもあり、それを使って石を割っていたのではないだろうか。

このように苦労して切り出された巨石は、水運を使って運んだと思われるが、船底が川底に着いてしまい動かなくなってしまった舟もあると思われる。しかも、牛伏山は綿貫観音山古墳から見ると南方に位置し、川を北上することになる。つまり、流れに

逆らう形で舟を動かして運んだことになる。ここにも多大な人数の労力が必要であったと思う。

無事に目的地に着いた後は、陸路を運ばざるを得ない。陸上運搬に活躍したのが「修羅」を呼ばれる、木々で組んだソリであったと思う。巨石を載せた修羅（ソリ）は、修羅の下に敷いた丸太を車輪代わりとして、多くの人が人力で引っ張ったのだと思う。

この綿貫観音山古墳の石室の壁石は、榛名山の火山岩が使用されている。天井石に比べれば小さいこれらの石材は、石持棒などに縛り付けて人足が担いで運んだのではないだろうか。

何しろ陸路は人力が頼りとなる。何百、何千という人が動員されたのであろう。途方も無い労働力であった事が容易に想像つく。それだけの人の力を動かしていた、綿貫観音山古墳に祀られた主人の人徳にただただ驚かされる思いである。

4, 考察

綿貫観音山古墳は、約 10km も離れたところの石を「石室の石」として使用するなど、祀られている人の権力の強さが表れている。また、これほど遠い場所から、たくさんの人の協力を得ながら運んだと考えると、祀られている人の人望（今で言う支持率）が厚かったと考えられる。

5, 感想・今後の課題

あまり興味の無かった石室の石について調査し考えてみて、古墳を作るにはたくさんの人手が必要だとわかり、『石』を通して見えた歴史の一コマがとても奥深く、興味深いものであった。群馬県は、昔、上野の国として朝鮮などとも交流があった権力者がたくさん居たと昨年の研究でわかったので、その人たちの古墳についても調べてみたいと思った。

6, 参考文献（参考ホームページ）

① 群馬県「史跡観音山古墳へのご案内」ホームページ

② ①内「見学の手引き（児童用・生徒用）」

③ 菅原久誠 著 「群馬県西毛地域に分布する牛伏砂岩の石材利用および地域住民の価値観に関わるジオツーリズム的研究」

④ 公益財団法人日本城郭協会 公認 「城びと」超入門！お城セミナー 第19回【構造】こんなに大きな石材をどうやって運んだのか？